

第四章 人の一生  
第五章 年中行事

## 第四章 人の一生

本節は主に増尾国恵氏・栄喜久元氏説、長澤和俊氏著書を主にしてまとめた。大方昭和前期以前。

### 一 出生

#### (一) 出産まで

妻が妊娠すると、その夫婦は種々の禁忌を守らねばならぬとされた。たとえば、欠けた茶碗で食事すると三口の児が生まれるとか、家畜類の殺傷や死人を担ぐことはタブーとされるなど、数多く伝承されているが、詳細は俗信の節で述べる。昭和初期までは、妻問い楯の痕跡を濃く残していたといえようか、妻は一子を得るまでは、大体実家での生活が多かった。新妻は夫方宅で定住するまでには、おおかた夏冬の手織りの晴れ着とふだん着一着ずつ仕上げ持参するのが通常の習わしであったが、みごもることは、こうした準備意欲をも大きくかりたてたといえる。また、お産が近づくと労働するのが安産に

つながるものとされ、畑をたがやしたり、大麦を搗いたりしたものである。

## (二) 出 産

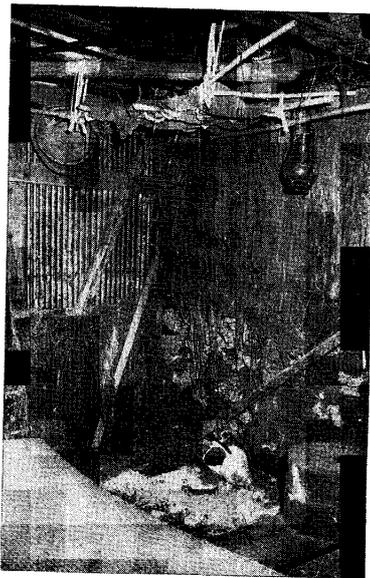
妊婦が産気づくと、ジュー（地炉<sup>ジロ</sup>＝母屋の台所に近い隅に置の広さほど地炉のかわり土で壁まで塗られた）は、清掃され塩で浄め<sup>キヨ</sup>られる。陣痛が始まると卵等の味噌汁を食べ、力をつけてジューに入る。大体妊婦は、だれにも知られず、安産して家族を喜ばせるのが最上とされてきた。もつと以前には、産気づいても仕事を休まず、畑の隅でひとりで産み、腰巻きに包んで帰宅した人もおり、かえって称賛されたと語り伝えられている。

難産の場合は天井から綱を下げ、それにつかまったりきんだり、母親や夫が後方から妊婦の腹を抱き声援を与えたと言われるが、一般には男性は産室をのぞかないのが常識となっていた。産児は、普通は妻方や夫方の母親が取りあげる。産児が現世に姿を現し初声をあげるのに応えて「イエー、イエー」（ハイ、ハイ）<sup>マシユイッシユー</sup> 塩一升、粟一升又位ドー」と位づけをする。これは悪神よりも早くとの配慮がある。塩は両性の原理より生じ、最高の清浄力

を持ち、なお調味の素でもある。粟は、粒が細かく、数多くして、多くの幸運・食運に恵まれることを意味するものだろうか。

## (三) 産後の処置

産まれると産婦の母あるいは姑が目なめ、鼻汁を吸って息をさせ、ヘソをつぐ。本島では、ヘソの緒を切ることを「つぐ」と言い、金物を用いず竹べらを使う。また、ヘソをくくるのにカラムシや芭蕉の繊維を使う。こうした処置は産婦がするのが建前であったようだ。出産後出る胞衣<sup>エナ</sup>を「ソイ」といい、ワラなどで包んで



ジュー（産室）  
左側に立ててあるのは胞衣包み

ジューの隅に立て、一日に三回水をかけ、三日目に明方<sup>アキボウ</sup>

を選んで屋敷外に夫が埋める。その場合、草木の葉のゆれ動く下に埋めると赤児が夜泣きするといわれ注意された。なお、産婦はお産直後は大変な疲労と空腹を覚えるので、そのまま眠り込んでしまう恐れがあるとして直ちにあたたかいおかゆを食べさせるものであった。

それにジューでは、ガジュマルの生木を燃やして産婦の腰をあたたためる。産婦には別に薬を与えることはなく、七日間昼夜あたたため、休養をとるだけである。産婦は心身共に弱り、特に赤児は靈力が弱いので、そうした母子を狙う悪魔の侵入を防ぐためにも火をたく意味があった。七日間、火を燃やし続けるので、「七日火」<sup>ナヌカビ</sup>ともいう。

また、産児や産婦は刃物など枕元に置いて寝るものだった。産婦は、ジューヌメー（ジューの前）で、できる限りの栄養と休養が与えられる。産後、元気を回復して起き上がることをウイタチ（起き立ち）といい、ウイタチが悪いとシラゲー（産後の余病＝主に貧血）になると言われたから、家族や親族から大事にされたのである。

次に、産湯を浴びさせるのは主に妻の母親である。浴びさせる前に産湯を右手ですくい、産児の顔にふりかけ

るまねをしながら「アツア、コーレ」と呪言みたいなことを言った。増尾国恵翁は「この唱え言は、産児が将来食物に恵まれることを予祝する呪言であつたらしく云々」と述べている。鼻中の汚物も口で吸い取り、口内は親指を入れて洗い、全身丹念に洗うが石けんは使用せず、卵の白身などを戦中・戦後は使用していた。また、産児の肌に変わつたものがあると、親子三人の爪を切つて布で包んで産湯に入れるものだったとのこと。湯浴みした赤児は腰巻きにくるんで寝かせた。

#### (四) 名付き祝<sup>ナイチ ヨイ</sup>

出産の当日、幼名すなわちヤーナー（家名）の命名式を行う。幼名は、最初に生まれる子には、父方の祖先の幼名を付け、次は母方と、常に父方を先にしてつけ、交互に付けるのが普通である。が、早世した祖先はできるだけさけ、長寿で功績のあつた祖先名が好まれる。

ヤーナーは出産した当日つけ、最も身近な親族間で、生まれ祝い、名付け祝いを軽く行うのが通例である。ヤーナーは「童名」<sup>フラビナー</sup>または「島名」<sup>シマナー</sup>ともいわれ次の三通りがある。

男子だけに通用する名

ハニ、ヤマ、トゥク、マサ、タラ、グラ、ダキ、ジャー、  
トウラ（たまに女子にも）、マニユ、サブル、ビチャ、  
ムトウ（茶花だけにウシャ、ハンドゥーという名あり）

女子だけに通用する名

ウトウ、ウンダ、ムチャ、マグ、タマ、クル、チル

男女共通する名

ウシ、マチ、カミ、ハナ、ナビ、チューハマドウ

その他茶花枚区に女子名でアートウ、アキなどがある。

これらは身近な物の名詞らしきもの、それに琉球歴史・説話関係人名と類似のものも多く、遡れば日本古代時と思われるものなどあり、最初の命名時代の差異でその意味の異なる場合もでる。例えば「ハニ」は「金<sup>カネ</sup>」とも古語の「赤土」とも解され、「ハナ」も「花<sup>ハナ</sup>」よりも「愛<sup>ハナ</sup>し子<sup>グラー</sup>」の「ハナ」の意にもとれ、今後の研究部面は多い。

当日幼名を付けてない者は七日目までには必ずつける。赤児は名付けの式には名付き衣<sup>ナイチ</sup>を着て臨む。その衣は産後作るものといわれ、背にマブイ（守り）を縫い込む。その守りとして、近親長寿者の白髪若干と白米三

粒を入れて縫い込む。

さて、名付き祝いの当日は、新生児のため「名付き飯<sup>ナイチマイ</sup>」を用意する。わざわざ釜を別にして炊くのである。その白飯を大きな茶碗に山盛りする。それに季節の野菜と魚や肉の煮付けに刺し身をつけた三品を高膳<sup>タカゼン</sup>に載せて神前に置く。なお、三献<sup>サンケン</sup>の吸い物の膳。また、一方には神酒、干物（ピムン＝スルメかコンブ・塩など）、盃を膳に載せておく。もう一つの膳には、塩・学用品・鎌・大工道具・漁具・トゲのある植物（アダン・サーラキ等）・小石等、女の子の場合は、鎌・大工道具・漁具の代わりに、ピラ（主にイモ掘り用の農具）・ザル・裁縫用具に替える。こうした四種のお膳を用意して神前に置く。

一同が集まると、姑が名付き衣を着けた産児を抱き、主人が祖神に祈祷をする。「トウツトートウガナシ、今日<sup>シユウ</sup>〇〇が生ま<sup>ウ</sup>りて、祖父<sup>テイ</sup>の名前を取<sup>ウブ</sup>って、八二<sup>ナニ</sup>とつけ<sup>テイ</sup>てお祝<sup>テイ</sup>いしますから、トウツトートウガナシ、何時<sup>イッチン</sup>までも、お見守<sup>ミーマブ</sup>りくださ<sup>テイ</sup>って、塩<sup>マシユイ</sup>一升<sup>シユウ</sup>、粟<sup>オー</sup>一升、百<sup>ヒヤク</sup>二十<sup>ニジュウ</sup>歳の<sup>ヌ</sup>位<sup>クレー</sup>あらしめて、清<sup>チュウ</sup>ら栄<sup>サカ</sup>い、清<sup>チュウ</sup>ら働<sup>キ</sup>きさせるように、幸<sup>ウブン</sup>運<sup>クリ</sup>呉<sup>リ</sup>れてください、トウツトートウ

ガナシ」と、大体同じような祈禱を捧げる。

一同礼拝がすんだ後、神前に置いてある神酒を盃についで産児の頭上でまわす。つぎにピムン（干物）も同じように「塩一升、粟一升ぬ位云々」と唱えながら頭の上で回す。次は、祝飯やお膳の種々の祝い物を一つずつ取り上げて産児の頭上でまわしながら祈願を唱える。例えば、学用品をまわしながら学問の達人になるようにとか、サーラキをまわしながら「ニギマイシランガネ（トゲに負けないように）云々」、小石を取り上げて、石などにつまずかないようにとか祈願を唱えながら産児の頭上でまわす。女の子の場合、糸巻きなどを取り上げ（以前は「ヲ」を巻いた「ヲウチグル」であった）、「ティンチュヲナグナリヨ」（手巧者女になれよ）などと唱える。こうして新生児の将来への祝儀が終わると、祝膳は産婦の側に置き、赤児は寝かせる。そして名付き飯ナチキマイは一粒もこぼさぬように皆に配って食べさせる。その後、一同祝宴が始まる。

## (五) 授乳と蓬湯フチミジ

新生児の胎便が出たあと、乳付けが行われる。乳付け

親は「チーアンマー」と言われ、成長後一生慕われるのである。これは、出産直後母乳が出なかったり、また何カ月か母乳が出ないときは、親戚中で同じ血統の丈夫な乳児を持つ婦人を選び授乳した。この人がチーアンマー（乳を与える母）である。赤児が男なら女兒の母、女なら男児の母を選び、アンニヤー（姉）またはヤカ（兄）チーコレ（乳食え）と言って飲ませる。これらは健やかな成長を祈つての呪言である。（アンニヤー＝麦屋地区ではアニンカという）

お産三日目にはヨモギを煎じてフチミジ（ヨモギ湯）をつくり、そのヨモギの汁や葉や茎で産婦の全身を暖めたり、乳房にヨモギの葉や茎を当ててもむと、産後の体が早く回復し、乳が多く出て新生児がよく育つとして実行されてきた。このようなことを二、三日続けると、産婦の体の穢れが抜け去り、母体が丈夫になるといわれた。なお、産後三日目は、フチミジを使うとともに、ジューの灰を取り出して塩で浄め、新たに火を焚きつける。これを「三日ぬ火替えミツカマチヘ」という。

(六) 七日祝い

産後七日目は七日祝い（七日マチ）<sup>ナヌカ</sup>をする。この日は燃やし続けたジューの火を消し、灰を取り去り、清掃後、塩で浄め、産婦も身を拭き清め、産の忌み明けとしてカマドの前にも自由に出入りができる。しかし、神前の水の初を供えることなどは一月程度は遠慮するのだった。また、この日は大和名<sup>ヤマトナリ</sup>（学校名<sup>ナリ</sup>ともいう）<sup>ナリ</sup>と<sup>ナリ</sup>って戸籍名の命名式も七日マナの祝いとともに行う。こうして産婦は心身とも浄め、子を抱き名実共に母子として祝いの座に臨み、パラジ一同と共に祝宴を催す。

(七) ハノイ（出初め式）

七日祝いをすました後、男子ならカノエの日、女子はカノトの日に出初め式（イジパジミ）を行う。それを「ハノイ」という。この日は母親か姑が頭に衣装をかぶせた赤児を抱き、白米一升を包んで頭に載せ、学用品を風呂敷に包んでザルなどに入れ、男子なら鎌、女子ならピラなど入れ、「ガッコウカティ、シンナレンニヤイカンヤ」（学校に勉強に行きましょうね）とか、「パルパルカティイカンヤ」（畑に行きましょうね）と言って門の外まで

出る。途中赤児のかぶっている衣装を開いて、日光を当て、「シューカロー、ティダヌクワードー」（今日からは太陽の子だよ）<sup>ナリ</sup>と言い門内に入る。こうして「学校に行ってお勉強をしてきました」とか「畑に行ってきました」とか言って玄関に向かう。玄関では在宅の者たちが賛辞を与えて迎える。そして、その頭に載せた一升の白米でハノイアツシー（ハノイ昼食）<sup>ナリ</sup>と<sup>ナリ</sup>って昼食を炊いて食べ合う。その後は、赤児は外に抱いて連れ出すことができるが、夜間は、赤児の額に鍋ススを型に塗り、抱く母の髪にはニンニクなどをつぶしてぬって魔よけに<sup>ナリ</sup>して出るものといわれている。

(八) テータチヨイ（朔日祝い）

七日祝いをすまし、新たな月の初めに行う祝いの式で、母子の晴れの儀式であり、児の社会入りでもある。この日は、母子は朝早く入浴をすませ、身を浄め、神酒二瓶と塩一皿、三組<sup>サンゲ</sup>の膳とピムン、ミカサビの盃など神前に捧げ、夫と共に児の幸運を祈る。午後二時ごろから、両家の親族をはじめ、近隣・親しい知人などが集まり、盛大な祝宴となる。この祝宴では、箸戦<sup>ナシコ</sup>や御前風の歌舞な

どもなされ夜半にいたることも多い。

## 二年祝い

### (一) あらまし

年の祝いは数え年です。十二支に従って、十三歳から始まり、二十五、三十七、四十九、六十一、七十三、八十五歳などのお祝いがある。そのなかで四十九歳以下は、親子兄弟だけで行うが、六十一歳以上はその家庭に応じて盛大になされる。この年祝いに当たる人には新調の晴れ着が与えられるが、六十一歳以上の祝いは、献立や儀式なども変わる。次に増尾翁（明治十六年生まれ）の著書を主に、町田翁（明治三十四年生まれ）の著書、その他を参考にして述べる。

### (二) 特殊の祝い

六十一歳以上の祝いの献立は、まず祈願用のお酒二瓶に塩一皿、次に三組の吸い物のお膳、ミカサビヌウブサービキ三重の大盃、祝杯、それにスーマシ（シトギ）、ピムンを高膳に載せておく。それとならべて、ピラバチ大きな平皿に別個にサシミ、ユデモノ（長方形に大きく切って煮た大根等）、レンガク（あげ

豆腐等大きめに切った物）などに飾り（竹の小枝にニンジン・大根を輪型にして刺す）をし、高膳に載せて並べ、その横の食台に七品〜九品の盛掛を積み上げて置く。盛掛は明治末期までは、ヒツのふたに載せたといわれる。

盛掛は守護神や来客に対する感謝の意があつて、財のゆるす限り豊富に用意された。昔は豆腐や豚肉などをできるだけ大きく切り、それにムツチャー（麦粉で平たく作ったモチ）、麦焼き（麦粉を油であげたもの）、干し魚、コンブ、それに大根やカボチャなど大きく切つて水煮した物などであった。これは後で各戸もれなく一揃いずつ配られる。ところで、この盛掛は、よくムラ（集落）の評判になるので、次第にふくれあがり、豚肉も半斤ずつ出す人、一斤ずつ出す人もできるようになった。特に復帰後の経済成長時は、一部姿をかえて記念品という名目が生まれ、鍋類から毛布・フトン類まで追加するようになり、近年、生活改善運動で改善された。

さて、案内した来客が集まり、諸準備が整うと、主催者が神前に香を焚き、お神酒ミキイチ一对を捧げ、一同礼拝後、ほぼ次の主旨の祝詞を捧げる。

お守本尊の神様・氏神様のご加護により、本日のめでたい吉日に親の還暦祝い（または八十五歳の祝い）を元気で迎えることのできたことは、神々のお守りのためのものであり感謝申し上げます。さらに百二十歳までも長寿で子孫のおみちびきができるようお祈り申し上げます。

神事が終わると、サーギを頂く式がなされる。サーギは祝いのお酒やスーマシ・ピムンなどをいう。この座には福床の前の一番座に当日年祝いをされる人、その次にサーギを授ける女の三人が座る。この女性は、当日お祝いをされる人の代行という意味で、身内から還暦を終えた女性を選ばれる。これが必ず女性に限定されるのは、遠い時世のオナリ神信仰の痕跡なのだろうか。

サーギを頂く式が終わったら祝宴に移る。ここでもナンコーや御前風・六調風の歌踊りがなされる。

次に八十八歳の米寿の祝いであるが、特に異なる点は、最初の供え物で、白米二升くらいを高膳に盛り上げ、その前後にトーカキを置く飾り物をしておくことである。

トーカキは木で作られる。トーカキは、いっばいになつ

たことを意味する。かつて店で米や塩などをマスで量り売りした時代、マスの縁を平らにするための木の棒がトーカキであった。トーカキは後で各戸に配られる。八十八歳の祝いがすんだ後の年祝いは、十三祝いに戻る。

### 三 婚 姻

#### (一) 配偶の選択と年齢

明治及びそれ以前の配偶者の選択には、特に血統・体質・知能に意を注ぎ、次は容色・家柄・家風・貧富などに気をつけたという。奄美・沖縄の他島でもあることだが、土族的家柄と普通の百姓の家庭との結婚は厳として行われなかった。昭和の前期でも親は、子供が青年期に近づくと、どこか家庭はどういう血統の家だとか、サムレー（土族）の家柄だとか、百姓の一族だとかの事前指導がなされたものである。しかし若者が美しい異性を慕う心に変わりはない。その侵し難い線になやむ往時の南島の若者の心情を率直に歌った、「高さ咲く花バナや登ヌブて取トラいくるしゃ、み枝ユダ（根枝ニユダ）握カちみとうウムてい思ウムたばかい」

とか、「天<sup>テイ</sup>ぬ白<sup>シラ</sup>雲<sup>クム</sup>に橋<sup>ハシ</sup>ぬ掛<sup>カ</sup>きらりゆ<sup>ユ</sup>み、及<sup>ウ</sup>ばらぬ思<sup>ニ</sup>人<sup>ソ</sup>に手<sup>テ</sup>懸<sup>イ</sup>き成<sup>ナ</sup>ゆみ」などの民謡に、その胸中をかいま見る思いがする。

明治のころは結婚年齢も低く、男は十九、二十歳から二十三、四歳まで、女は十八、九歳から二十一、二歳までにはおおかた終えたのではなからうか。現に明治生まれの老婆で十八、九歳で結婚した人は少なくない。明治中期までは、特に女性はほとんど就学しなかったし、十五、六歳からメーラビはじめとして夜遊びに出て、十七、八歳は女性にとつては、まさに青春真つただ中といえよう。それを傍証する民謡に、「十七、八頃<sup>グ</sup>や、女<sup>メ</sup>ぬ真<sup>マ</sup>盛<sup>サ</sup>り、今<sup>イ</sup>咲<sup>マ</sup>かぬ花<sup>ハ</sup>や、にや何<sup>イ</sup>時<sup>チ</sup>咲<sup>サ</sup>きゆんが」(十七、八歳のころは、女性の人生中で花の満開にもたとえられる時期である。今咲かない花はいつ咲こうとするのか)と歌われているので想像がつく。現代のように高校・大学どころか、特に明治八年以前は、全く学校がなかったわけだから、この夜遊びや婚期の早かったのも推して知るべしである。

## (二) 夜遊び

夜遊びについては「民謡」の節で詳説されているので、ここではあらましを述べておきたい。

夜遊びはおおかたが知るように、若い男性が夜、娘宅を訪れ、三味線伴奏で恋歌など歌って楽しむ遊びである。この夜遊びは青春時代を楽しむだけでなく、結婚への媒介・掛け橋となっていたことに大きな意味がある。

その遊びの起こりは、古い時代、この島の娘が芭蕉衣の準備の夜業<sup>ヨウナヒ</sup>をしている宅へ未婚の男性が集まり、共に夜業や話し合いなどし、その後、三味線の渡来後は共に歌など歌い合うようになったものだろうと言われている。夜遊びで歌われる歌は、大方琉歌式のものが多く、三味線の渡来(沖縄へ)などからして近世後であろうと考えられるが、この遊びでは互いに恋慕の歌などをかけ合うことが行われ、琉歌以前のウタカキ遊びの影響があるのではなからうか。

明治期は夜遊びが大変盛んであり、幕末の頃も盛んであったろうと古老は語る。しかし、昭和期の戦前も盛んに遊んだものである。が、戦が激しくなったため禁止に

なり、戦後復活のきざしを見せていたが、本土への進学・就職や新しい流行歌・ギターなどに押され、自然に衰退してしまった。

夜遊びは、一人の女性に対して二、三人ないし五、六人の男性が集まるのは普通で、ナーウチメーラビ（高名な娘）になると島内から十五、六名も集まる。それで夜遊びに来るメーラビの家では、夕食を早目にすませ、身支度を整え、若者たちの来るのを待っていないければならぬ。夜遊びは、庭先でムシロを敷くか、台所、または納屋などで車座になってなされる。大体十一時ごろには終わる。こうして毎晩通っているうちに大方相愛の意中は推察され、両方の仲が進展すると、草履や手ぬぐい・指輪などを人知れず約束のしるしに手交するという。古老の伝えでは、このときにシヌ（髪を結う場合の添毛）やカンザシなどのやりとりはするものでないと伝えられている。もし、どちらかが先に死んだ場合、その相手も日ならずして後生に連れ去られると言われている。それで次のような歌がある。

「指輪約定あまく縁結でいシヌトウドウミ約定命ま

ぎり」（あまく＝しばらく）

なかには幾年月か毎晩遊び続けてきた意中の人と、親の反対にあい、やむなくてはなればなれにされ、人知れず涙した女性たちも幾多あったことであろう。次の民謡は、こうした運命の境地から生まれ出た歌ではなかるうか。

道ぬなぎなぎに 吾が落とす涙

退かん気ぬ里とう 退ちやる涙

（長い道すがら、わたしが落とす涙は、ほかでもない、別れる気のない彼氏を断わらされてしまった、やるせない涙である）

また、この歌は「意中の仲でない人に身を許してしまった無念の紅涙」と解する見方もある。

いずれにしても一回きりの人生において、相思相愛の彼と結ばれ得なかった己の運命のせつなさを歌っている。

夜遊びで最後に付言したいのは、歌遊びで最初に歌われるのは「此処ぬ親御二人、許びていたばり、物知らぬ私達が、遊びしゃびゆし」（ここのご両親様お許しください。物事のわからぬ私達が遊びをしますから）といっ

た礼儀の歌かち始められること。また、当家の娘を屋敷の外に連れだつて遊ぶ場合は、その代表者が責任をもつて親の許しを得たことなど、狭いシマ内ゆえ不倫な行いはほとんどなかった。なお、遊びの終わりもほぼ時刻が決まり、娘の別れのあいさつによつて、その夜の遊びは終わった。

(三) 「<sup>ハガ</sup>拝ん<sup>バジ</sup>始み」より「<sup>クチムス</sup>口結び」(「<sup>クチダル</sup>口頼ん」)へ

夜遊びなどにより双方の恋仲が煮つまると、男は自分の両親の同意を得、お願いする日時を相手の女と相談のうえ、両親、または伯(叔)母か伯(叔)父か三人くらい、準備を整え、他人に知れぬよう深夜八ガミ(お願い・拝み)に行く。持参する物は、焼酎の三合瓶(戦後になると五合〜一升)に、ちよつとした肴程度持参(時代と共に変遷)し、事情をうちあけ、結婚を申し込み、持参した酒を神前に供え、お酒を注いで女方の両親に差し出す。その際、両親が快く持参の酒を飲めば、男方の申し込みを承諾したことになる。(二、三度要した事もあるという)さて承諾が得られると男方では、いい日取りをみて、女方と相談のうえ、ごく身近な近親代表が御馳走(ませ

ご飯を大ザルに入れ、肴用の御馳走なども)を用意し、夕食後、女方に行き、婚約の小宴を持つ。これを「口結び」といい、これで公認的形式が成立した事になる。

以上は夜遊びから発展した結婚で、本人にとっては好ましい型と言えるだろう。

結婚の型には、親同士の話し合いで決めた後、本人の同意を得る型もあつて、これは多少無理な場合があり、ながい家庭生活のなかで耐え難い悲劇におちいることもあつたようだ。また親族・知人などの勧めで結ばれるケースなどもある。栄喜久元氏が麦屋地区の明治生まれの三十二人を対象に調査した結果によれば、恋愛結婚と思われる者七五パーセント、親相談による者二五パーセント、人の勧めによる者なし、となつている。これは、他地区になると親相談による率はもっと変わる可能性も考えられる。

#### (四) ミービキ

ミービキとは結婚式を意味し、沖絶で言う「<sup>ニールヒ</sup>根引ち」であり、「<sup>ナガドーブ</sup>ウブダレン」あるいは「<sup>ナガドーブ</sup>長豆腐」ともいう。

長豆腐とは、式の御馳走に長く大きく切った豆腐を使つ

たからである。ミービキはクチムスビが終わった後に、盛大に行われる本格的な式になるわけであるが、明治中期以前は大体、長子が生まれてから行われることが多かった。明治末期以後は口結びの後なるべく早く行うようになったとの説があるが、現在は、口結びの後、間もなく結婚式を行い、妻は夫方で生活するようになっていく。

ミービキを行うことについては、男方で日柄を選定して女方の家に行き（主に口結びに行った三人で）、その事情を中心に、日柄を合わせて日時を決める。時間はおおかた午後三時ごろが普通である。次に参加人員を決めるが女方も男方も大体似たような数にする。その次に御馳走の程度について決める。例えば、お膳に幾種類の御馳走を載せるか、またその内容の程度は大体どのくらいにするかなどである。この三点は最も大事であり、女方の意見を尊重して決められる。当日は、そこで決められた通り実行される。もし晴れの式で相手方に恥をかかせ、せつかくの結婚式にヒビが入っては、との配慮からである。

次に昭和初期の麦屋での状況を記す。（栄喜久元説）

当日になると男方から例の三人と兄弟やパラジの代表が持参する物を持って女方に行く。その場合、あらかじめ話し合ったように、長豆腐・魚・大根・昆布・豚肉・ムツチャー・アカヤマン（ツクネイモ）など五品か七品を相手方の戸数分用意し、長持のフタに載せて男二人で担いで行く。そのほかサシミ箱と酒一升を持参。なお「ナビジューキ」といって初の吸い物や次の吸い物まで二人がかりで運ぶ家もあつたという。長豆腐の場合、一箱の豆腐を五つに切るか七つに切るか、なるべく大きく切るのが財力の豊さを語り、式の盛大さを表すものとされた。一箱の豆腐とは、一升の大豆で箱型に入れて作った豆腐である。

一行は新婦の家に着くと、持参した料理や焼酎は神前に供え、座につく。新婦宅では、あらかじめ用意した祝膳を新郎側の前に配膳する。祝膳の内容は例えば、初日の吸い物（白身の魚・ネギ・トウガ・結び昆布、その他奇数にする） 次の吸い物（ソーメン・肉類、他） ナマス 中皿物（チュウダラムヌ）（大根・昆布・魚の煮しめ） ミシジマイ（たき込み飯） 葉物（バナムヌ）（サネンの葉など手のひらの大きさに切ったものに、ムツチャー・南瓜（ナンカ）・大根・冬瓜（トウガ）・

魚などの煮た物を置く。一切れが大きいほどよい。長豆腐（膳の左側に芭蕉の葉などに二切れずつ載せる）、以上七品が通例。

新婦宅での新婦側の膳には初の吸い物と次の吸い物だけが載せられ、あとは新郎方の持参した料理が各膳に配られる。準備が整うと、新婦の父が祖霊に感謝と祈願の祝詞を捧げる。現在は、このあと盃事をなすが、昔は三三九度の盃事はなかつたとのこと。干物ヒムンなどが配られたことからして一对のお酒が、新郎、新婦、新婦の父母、新郎の父母、ついで新郎方の上座から順に配られ、次は新婦の上座からピムンの順と同じように配られたものと考えられる。次に新婦側のだれかが、三重ミカサヒの盃サージキを新郎例の上座から順にさし出す。後には御前風など踊られる。

午後の五時ごろになると、新郎側から新婦側を案内し、一同打ちそろって新郎宅に向かう。この場合に新婦は、生家の表戸口から出て、新郎宅の表の戸口から入る。また、新婦側から新郎側に行く客は、なるべく多く来られるように案内する。新婦側も料理など同じように長持の

フタなどに入れて新郎宅に行く。新婦は伯母などに付き添われて新郎宅の座につき、「よろしくお願いします」とあいさつした後は、新郎側の主催で、ほぼ新婦宅でしつたような式が進められ、披露宴に移り、新郎宅での宴がより盛大に行われ、夜半に及ぶことが通例で、昔は徹夜することさえあったという。こうして料理人の慰労まですると三日に及んだ。往時は、この式の盛況ぶりがよく茶飲み話の話題となったものだが、経済上「口結び」だけに終わった者も少なくない。近年は新生活運動が盛んになり中央公民館などを活用し簡素化された。

## 四 葬 祭

### (一) ウイトウギ（起き伽）

病人が危篤状態になれば、親族・縁故者・近隣の者が寄つて来て、病人を囲んで夜通し見守る。すなわち「起伽トツギ」である。トウギをして守っていないと、悪魔が病人の弱い霊を誘惑して連れ去るからという。重病人の枕元には刃物や大工の曲ハンショウ 尺ガニなどが置かれた。助かる見込みのうすい病人の家で夜遅く米を搗く音や釘を打つ音

がすると、死の予兆だと言われた。また、夜半過ぎて、伽をする人が疲れてうたた寝をするすきに、危篤患者の枕元で屈強な男三、四人が「今、入れんか、早く入れんか（棺に）」とせいでいるのが、うつら夢に現れ、あわてて飛び起き、塩で打ち払うこともあったという。それで、交替で伽をして夜通しすきをあたえず見守るのだった。

## (二) ユビコイ（呼び乞い）

いよいよ手首の脈も絶え、息が絶えてしまうと、死者を起こして座らせ、大声でその名を呼ぶ。これを「ユビコイ」という。呼ぶこと数回に及んでも応えねば、初めて死者としての扱いを受ける。まれに生き返ることもあり、これを「ユビジテイ（呼び出して）」という。かつて、このユビコイは最も近親者である数名が大声で叫ぶので、近隣集落一帯に響きわたり、だれが死んだのだ、というところがわかるものだった。呼び返すことができなければ「ウブガミヌミジ（大きな水がめの水）」と称して末期の水を飲ませる。この水は死者と最も縁の近い者が飲ませることになっている。こうしてすんだら死体は、もとのように寝かせる。

## (三) 後生支度と周辺

末期の水で、この世と縁が切れた死者の旅支度は、まず沐浴モクヨクから始まる。水を汲みに井戸に行く人は二〜三人といわれている。汲んできた水に湯を入れて（普通と逆）ぬるま湯をつくる。湯浴みをさせるには死者の近縁者の男一人が死体を支え、女二人で浴させるようになってい。死体を湯浴みさせる場合、柄杓ヒシヤクを逆手に持って、ぬるま湯を三度かけ、その後は湯を普通にかけて洗い浄める。顔のひげ剃りも最初は逆手で剃り、後は普通に剃る。手足の爪や毛髪を若干切り白紙に包み、後、棺に入れて持たせる。また、死者が女の場合は髪を結び調髪して生前同様にする。

死者に着せる新調の白衣及び他の衣装（グシヨーキパタ<sup>タ</sup>後生衣）等を縫う場合は、糸の先を結ばずに、下から上に縫い放しにする。また、生存中奉納踊りに出た人や祝女・奉職勤め人には、必ず白衣と共に白布でつくったはかまを着せ、最後の上衣に羽織袴（普通のもの）を着せるとのこと。いずれの衣も背のマブイのところ（背紋に当たる位置）に六センチくらい縫い目をあけておく。

そして、死体の湯浴みをさせた三人で、表座敷の畳の上には畳一枚敷き、その上に新調のムシロを一枚逆さまに敷き、ムシロの中ほどの小縄をとどころ切り、その上に死体をあお向けに寝かせる。左手を上にし両手を胸の上に組み、膝を両方ともに立て、頭は手ぬぐいでおおう。さらに体は上衣一着でおおう。

死者の周囲にはビヨープを立てるが、ない家庭ではカヤを張る。祖先の神床の前に幕を張り、幕には家族の晴れ着をうち掛ける。死者の枕は大工によつて白木の板で作られる。死者の枕辺には机を置き、その上に白木の位牌ハイを立て、花と水とお酒を供え、香を焚タき、それに生前愛用していた物などを供えておく。死者の食事は、朝・昼・夕の三食の初が白飯、汁、小皿に味噌・塩などが供えられる。その場合に、ご飯のまわりは白紙で囲むように特別な仕方かこむ。

#### (四) 葬式の各係

重病人が危篤の状態になると、近親者が寄り集まって、葬儀の準備を話し合い、各係の選定などを打ち合わせる。息が絶えたら、使いをやつて早速各係に依頼する。葬儀

の各係を挙げると(係のことを「当アタい」という)、坊主当ホーシい、帳付チヨウき当チい、総当ソウい、大工ヘイク人、池掘イケい人、奉公フク人、祭マチい当チい、酒サイ当イい、枡マシ当イい、鍋ナベ当イいなど。

「坊主当ホーシい」は、坊主を誰にするかを決めて、依頼に行く係である。司祭は現在は神官であるが、明治初期以前の仏式葬儀の痕跡で、普通神官を坊主と言っている。

「帳付チヨウき当チい」は、弔トム人ムライからいただいた金品などを記録する係であるが、昔は記録のできる人がまれであったから、近年まで表座敷の上座に座をとっていた。

「総当ソウい」は、総務的役割で全般に意を配り、葬儀がスムーズに進行するよう努める。特に給食・弔問客の接待の予算・計画及び進行ができる人が選ばれる。総当ソウいの下には手伝い人が数名つく。

「大工人」はできるだけ身内から雇ってくるが、いなければ他から雇う。霊屋や棺桶などを作るのが主で、これに大工の経験のある者二、三人と旗・チヨウチン・ゾウリ・ホウキなどを作る人数が割り当てられる。大工人の上方は舟の帆などを張り、日光をさける。棺桶を作るときは、お膳に酒・ピムン・塩・曲尺などを載せ、「清チユ

ら船を作ります」と、(現在はカンとガンを農協が世話している) 祈祷を捧げてから作るものだった。

「池掘い人」は、死者を埋める穴を掘る人をいう。池掘い人は比較的遠いパラジヤ近隣などから三人頼まれる。喪家で昼食をすませ、お酒・塩・ピムン等をはじめ掘り具やワラなどを持って行く。そのなかの年長者が墓の地神に「ここに何某の屋敷穴を掘りますからお許しください」と地面に酒を捧げる。また隣の墓にも「あなた方の隣に何某の屋敷を掘りますから驚かないでください」と、酒を地面に注ぎながらサーリワキ(言い訳)をする。後はお互い酒やピムンを交わして穴を掘る。葬列が見え出したらワラマチを燃やして御霊ミタマを迎える。

「奉公人」は死体の入った棺を墓までかつぐ人をいい、親の場合は、身近なミークワオイ(甥)に当たる人が担ぐことになるが、四人とも甥がそろうことはまれだから、近親者のなかの若手の男が選ばれる。奉公人は新しい手ぬぐいを肩にかける。死体を入れる場合も奉公人四人でムシロと共に移す。

「祭い当い」は死者の枕辺にいて線香を絶やさずにともしたり、死霊に酒をあげたり「何某が別れの手ぬぐいを

持って来られたよ」などと一々死者に報告などする役。

「酒当い」は、弔人にもれなく大盃を差し回し、また、後で一同に労を謝して大盃を回す役である。

「柩当い」は、葬儀のため持参した白米・豆腐・味噌・塩・野菜などを台所で受け付ける係である。

「鍋当い」は、炊事主任にあたる役で手伝い人が数人つく。

かつては、この炊事の準備ができるまでがまた大変だった。俵を担ぎおろして、モミを出し、すりウスでモミをすり、臼を列べて米をつく。一方では野菜の調理をする者、屋外に幾鍋も並べ、屋敷内は各係の活動で大変だった。近年は折り詰めなど業者に依頼でき便利になった。

#### (五) ドーヨー(親族が裏家に持参し合う物品の総称)

近親間に不幸や不慮の災害があると、物心両面にわたり常に相互扶助の態勢であった。葬儀の場合、近親者は死者との続柄に応じ、表座に酒一斗以上・旗布・手ぬぐいを供え、台所には、白米一斗以上・豆腐一箱・味噌・塩・野菜などを持参する例になっていた(現代は簡素化)。知人は酒と手ぬぐいを持参し、他人は金銭だけで

すませた。

(六) 葬送の携帯物

増尾国恵氏の著書より

竹箒二本、提灯二張り、ガジマル枝にシデをつけた物

二、草履（鼻緒をつけない）一足、下駄一足、弔旗五旒。

弔旗は、山原竹ヤンバルダイといわれる竹の尖頭部を約六〇センチ

くらいの長さに切り、半握りずつをもって、切断部を交

互に白布でその中央部を巻き、布の両部は六〇センチか

ら一メートルくらい垂らし、長さ二・五メートルく

らいの竹棒に吊るして作られる。旗数は江戸時代までは、

死者の身分や閲歴の相違によって決まっていたという。

琉球服属時代の末期から薩藩服属時代の初期頃の世主

（島主）の場合は、九クーチ旗、祝女の頭（ウブアンサーリ）

の場合も九旒。江戸時代の与人や横目やその夫人の場合

は七ナナ旗、一般民は五イチ旗という決まりになっていたと

の伝えである。また旗の色は、以前は赤・白・紫・黄・

青が用いられていたが、現在は白と赤だけが用いられて

いる。

(七) 入棺

かつての身内の婦女は、絶命したときから、声を上げたり下げたりして、あたかも歌を歌うように号泣したものである。これは昭和初期まで筆者も見聞したが、現在は親子・兄弟姉妹の情愛の濃い人だけが、別れるとき、小さな声で泣く程度になった。入棺前には最後の別れの盃として酒を注いで別れのあいさつをするのである。与論は以前から他の島のように泣人を雇うことは決してなかつたといわれる。土地の習慣として酒を二合瓶二つに入れ、棺の中の死者の枕元に置く。一本は出迎えの人達に、一本は死者の先祖への土産物として、死者にその旨を告げて入れる。その他死者の愛好物や後生の近親者への伝言も、生きている人に語るように話される。用が全部終わったら死者の口や鼻の前面は手ぬぐいで固くしめる。棺のフタには釘が打たれる。次に棺の頭を後ろに回し、死者が起きて座ったとき前に向かうようにする。入棺後は、神官が祝詞ノリトを読みあげる。この時、喪主・位牌を持つ人・奉公人は死者の枕元に並んで座し、婦女子は棺の周囲に座する。

(八) 出 棺

増尾氏著書より

出葬の順序は、竹箒が先頭になり 何某の墓と書いた旗 提灯 ガジマル花 御神酒膳持ち 竹箒 草履 下駄 ガジマル花 提灯 棺旗 本位牌持ち 位牌の台 持ち 棺の順に行列する。

乗馬を引く場合は位牌の後から引く。位牌及びその台や乗馬の上、棺の上に傘を張る。葬送途中、奉公人四人のうち特に依頼を受けた者が一人、山竹の一握りを結び、行進中絶えずガン（棺の覆い）の上や奉公人の頭や肩の付近を軽くたたいて、悪魔が奉公人に乗り移るのを被い除いた。

明治中期までは、葬送の行列が墓場近くの小高い丘にいったん立ち止まり、棺を降ろしてフタを開け、死者にこの世の最後の島見せをさせ、この世との別れをさせたといわれる。その丘を「島見イパンタ<sup>シマミ</sup>」といい、その跡が墓地近くに残っているという。また、その頃より以前には墓地に着いてからも棺のフタを開け、近親者が最後の別れをして、棺のフタを釘づけしたという。

なお、往時は、貴族の葬送の場合には、馬引きが行われ、鞍の上には紙でいろいろな飾りをつけ、カンザシをさし、両方から二人の男が馬の手綱を持ち、位碑の後をつけて馬を引きながら、絶えず「ハイハイ」と唱えつつ進んだ。棺が墓地に到着すれば、鞍を解いて馬を放した。すると馬は平地に行つて数回寝返りをする。馬引きは馬を捕らえて帰り道を変え、喪家に到着したと伝わる。

（注）規在も出葬順はほとんど同じ、  
りは厳守されている。ちなみに野辺送り中の女性らの泣き声は衰退。

(九) 埋 葬

葬列が墓地近くに見えると、池掘い人は、ワラたばを燃やし死者に墓場の位置を知らせて迎える。墓地に着いたら担い棒をはずし（棒は根元が前になっている）、ガンもはずす。穴は四尺程度掘られ、棺の下の四隅には平たい石を敷く。それは棺を安定させるためである。棺の上はムシロで包む。このとき棺には竹<sup>注(1)</sup>を割って二本さし、マブイの出入り口とする。喪主が<sup>注(2)</sup>一握りの砂を逆手で棺の上に投げると、ブーク人が砂で埋める。棺の上に位牌

を置き、それをおおうようにガンをさし込む。花は前方左右におき、旗は周囲に立て、草履と下駄は後方に置く。香を焚き、神主の祭詞を経て、喪主が謝辞を述べる。その後、一同海辺に出て、沖へ向かって指先で海水を軽く三度はね、手足や顔を浄めたものだが、近年、この風習はすたれたようだ。帰りは後ろをふり返らず、別の道を通って戻る。これを「道替え<sup>ミチゲ</sup>」という。葬儀は忌みごと



海水での浄め  
(本田碩孝氏提供)

であり「逆様事<sup>サイシマクツ</sup>」と言われ、ほとんど反対の作法がとられる。喪家では塩や浄水が用意され、それで邪気を祓い浄めて屋内に入る。

注(1) 共に消失。(1) は本土では「息つき竹」と言われ

れ蘇生への望みをかけた痕跡とみられるとの  
研究家説。

#### (十) 特殊な場合の葬祭

前記の葬儀は、数え年十三歳以上の普通の死者の場合に行われるものであるが、ここでは、その他の特殊な場合の葬制について述べる。年齢は全て数え年である。

##### 1 ミジグワー(水子)

(以下増尾氏・南山大学報告を主に記述)

「ミジグワー」というのは、生まれてから七日以内に死んだ赤児のことである。母胎内の羊水の中の生活から間もない「水子」のようなことから生じた語だろう。すなわち生後七日目の「名付き祝」を待たず死んだ者をいう。

死んだミジグワーは、父親とほかに家族または近親の男二人がつき、着物を着せてフブキ(藁)などで作った袋

状の物)に包み、ウブンオーダ(藁やイ草で編んだ物入れ用具)に入れて、ワラビガンシヤ(幼児の死体を葬る岩穴)に葬る。現在は墓の隅に葬るが改葬はされない。ミジグワーは名付け祝を経ずして死去したので、社会の一員としての儀礼を経ないために、葬儀も水の初も祭りもないわけである。ミジグワーはイヤープジのうちには含まれず、従って位牌もないわけである。

## 2 生後七日以上六歳までの場合

名付け祝いをすませた、生後七日〜六歳までのうち、二、三歳までは畳の上には寝かせないで、母親か祖母または伯叔母が、死体の頭を左腕の上に載せて抱く。この

ころの乳幼児を抱き子グラーという。葬式は親類と近隣で簡

単に行う。死んだ子の父方の祖父(六十歳以上)が背負い、近親者か親族の男二人がついて墓地に連れて行く。

父方に適当な人がいない場合は母方の祖父が背負うか抱くかして連れてゆくが、その人は、刃物を帯の左側にさし、子供の上から白衣を着けて傘をさす。一人は神酒と水と食膳を持ち、一人は竹やカヤ縄などを持って墓地に行き埋葬する。

埋葬の際、死んだ子を背負った(あるいは抱いた)人が左足で逆に後ろにけりつつ「お前には、父も母もないから後返りするな」と言う。墓地の囲い内に祖先とは離して棺に入れて葬る。七日祭は三日目にくり上げて行い、死後二、三年目に三十二年忌と名付け、形式的に終える。年々の年忌祭は、成人者の年忌祭と一緒にし、握り飯十三個を供える。改葬は成人者を行うとき、一緒にする。

## 3 七歳以上十二歳まで

葬式は成人者に準じてなされる。棺は成人者を埋めた所から少し離して埋める。改葬は成人者を行う際と一緒に。年忌祭は十二年間行われ、十三年後は他の成人と一緒に。

## 4 十三歳以上の場合

十三歳の年祝いをした者は、社会的に一人前として承認され、この年祝いを済ませた死者の葬式は、成人の場合と同じように行われる。与論島の葬制は、十三歳を基点として、その前後に大きく二分されることになる。

## 5 七十三歳以上の場合

七十三歳の年祝いをすませた後のトウブレ(葬式)は、特にサーギ(貴い白髪の意味)といって、いろいろ

な物を参会者のためにお膳に載せていたが、近年生活改善で廃止になり、別にサーギといって大盃を献げる。

## 6 特殊な死の場合

生前、特殊な難病患者であった者・自殺者・強度の精神病者の葬式には、別の位牌が作られ、永久に祖先と合祀されないことになっている。これをイペーワシ（位牌分け）という。死体も墓地の隅に埋葬され、年忌祭の供え物も祖先のものとは別に供えられ、ジシ（納骨洞穴）時代は祖先と同じジシには納められなかった。

## (十一) ナガチャと三日祭

ナガチャは葬儀の翌日をいい、死んだ翌日葬式をする。と、ナガチャと三日祭（ンチャヌトートウ）は同日になる。ナガチャには家族が朝早く、水の初や榕樹ガシマル小枝葉携ハナ帯で墓参に行く。ナガチャにはパラジは、チャージューキといって重箱にサシミ・魚・菓子など入れて喪家に行く（現在は、簡素になった）。喪家でも煮物や菓子などを用意してナガチャの昼食をする。位牌の前にお膳を供えた後、祭り参加者に配膳し会食する。会食が済んだら竹や縄を持って墓に行く。持参した縄や竹でガンの防風

対策をしたり、砂利でガン内外を整備したりする。墓から帰ったら、葬式当日のように門前で塩・浄水で身を浄めてから入る。家では総当いの指導のもとに鍋当いが夕食膳の準備をしている。夕食前に帳付けやトーグラ当いなどの収支全般にわたる報告があり、金銭と帳面は喪主に渡され、相互に謝辞が述べられ会食に入る。

ナガチャと三日ヌトートウが一緒になった場合は、ナガチャの献立のほかに祭りのムツチャー（白米をむして作ったモチ）を作って供える。祭りに来る人は、米・神酒・お金などのトートウヌメー（御神前供え物）を持って来る。もとはお金の代わりは、ムツチャー・大根・豆腐・魚などであった。祭りに供えたムツチャーは、全員に配られる。

## (十二) 死後の祭り

死後三日の祭りの後は、七日祭りがあつたが、明治四十二年、桃内音吉氏が神官のとき、神式で十日ごとに祭りをするようになった。昔は七日ごとに祭りがあつて四十九日で祭りシ一ニチチで終わりであったが、現在は、十日ごとの祭りで三十日でシ一ニチをする家が普通になった。シ一ニ

チになると白木の位牌は焼きあげて、祖霊の位牌に移るのである。以前は五十日イチナヌカにシーニチをしたとも言われる。

シーニチには神官をおともして、パラジ全員が集まって盛大な祭りをする。戦前は、シーニチの祭りが終わるまでは男はヒゲもそらず伸び放題にして、慎んで供養をした。昭和初期までは、死後四十九日目にヤブを呼んでムンジウトウ（思い事＝死者がこの世の近親者に思い残すこと）を語らせるものだった。特に海での死者は期日を早めて、月の水の初の命日にムンジウトウを語らせた。

その後は、ピヤカニチ（百日祭）があるが、この日には近親のパラジが集まって祭りをする。以前は、百日祭がすむまでは、芭蕉の繊維をとったり、竹細工をしたり、酒や味噌をつくることは慎むべきとされていた。

この後は二年・三年・七年・十三年・十七年・二十五年・三十三年目に、それぞれ年忌祭（数え年である）がある。遺族は、こうした年忌祭のほかにも、毎月の命日（ウティビ）に水の初・ガジュマル小枝葉・ウブク（御飯）を供える。また、年の命日には最も身近なパラジだけの祭りとなる。

なお、三十三年忌祭は最終祖霊祭で、最も盛大に行われ、この祭りがすんだ霊は昇天するといわれ、その後は「水の初」と「洗米アレケミ」を供え、煮物は供えない。

### （十三）改葬

埋葬後、三、四年経ると掘り出して改葬を行う。改葬することをフツガ拝みゆんとか、清チュらくなしゆん、などという。

あるいは新ミくなしゆんともいう。改葬の時期は旧暦の三月二十七日ナヌカミシヤか二十九日クニヌカミシヤであり、また、十月（現在八月が主）の二十七日と二十九日も改葬日と伝わる。改葬の前日は家族の者が墓に行つて、「明日は賣方を軽く（改葬のこと）しますから」と霊に予告する。家でも家族をはじめパラジが集まって、水の初・花・お神酒を供え、また夕食のお膳や翌日持つて行く白衣や手ぬぐいなども供え、翌朝の祈願・お告げをする。

当日は、早朝暗いうちに、死者に最も縁の近い者たちが、花・お酒・白衣・手ぬぐい・バケツ・鎌・掘り具・布切れなどを持って墓へ出かける。墓に着くと、年長者が香を焚き、神酒を捧げ「これから御身を軽くしてあげますから、玉になって（白骨になって）拜まれてくださ

い」といった意味の祈祷をしてから掘り始める。

こうして早朝行うのは、死者の遺骸を明るみに出すことと特に太陽にさらけ出すことは、改葬される方にとって大変な欠礼であること、ほかに白骨化していない場合は、死者をはじめ遺族の世間体も悪いという意味がある。ミイラ化している死体は、生前現世で悪行があったり、悩みが解けきらず、思い切つてあの世に行けなかつた者として嫌われた。

掘り出すのは男で、拭き清めるのは女性が通例である。掘り係は初見に胸をときめかすわけだが、白骨化していなければ、思い切つて死体の立てている膝を目を閉じて横に振ると、見込みのあるのは膝が崩れるといわれる。ミイラ化している場合は「何の未練があつて先祖のそばに行けなかつたか、思い切つて行け」と気性の強い者が肌を鎌で切開し、埋めて次期を待つたともいう。

白骨化しているときは、まず頭骨を取りあげ、死者に最も縁の近い者に渡され、傘の下で拭き清め、骨を抱いて傘の下に座する。骨は素焼の特製のカメに足の骨・胴・手、その上にノドボトケ、一番上に頭骨を載せ、白

衣や手ぬぐいも共にカメに納め、祖先の骨ツボの側に埋める。

後、海辺で潮はねの作法をし、帰宅後、家で宴をもつ。

## 第五章 年中行事

(注) 本節は増尾国恵氏著書を主とするため、地域差がある。祭り行事は現在も旧暦をほとんど主とする。

### 一 正月行事

#### (一) 若水汲み

元日は、イチバンドウイ一番鶏イの声を待つて若水汲みに井戸へ行つたものだと古老たちは語る。井戸の側に来たらセキ眩セキばらいをして井戸神を起こし、その年のアキホウ明方エホウ(恵方)へ向かつて汲むもので、かつては男の受け持ちであつたともいわれる。

なお、表の戸を早く開け、福の神を迎え、若水で身を  
浄め、若水を煮沸した「お茶の初」を神前に供える。

## (二) 吉書

汲み取った若水で墨をすり、表座敷で晴れ衣を着て威  
儀正して書き、先生や親族古老に配る。吉書は寺子屋式  
書初めで、これを行えば学問が上達するといわれ、白紙  
一枚に清書し、それを祝詞のように包装し、表に「吉書」  
と書いて配る。低学年程度の子供は、右側に「吉書」と  
書き、中央に「天下太平」、左方に「元旦」「何某」とし、  
左上方に「歳徳大明神殿」と書いたようである。なお、  
長じて高学年程度にもなると、書く表題は異なってくる。  
これは主に明治中期以降の城集落で学業に關心のあった  
家庭の場合に多く、昭和初期まで痕跡を残した。

## (三) 元朝の儀

若水で家族全員心身を浄め、神前で家長を中心に今年  
の祈願をし、<sup>イチチーヌウミキ</sup>一対の神酒・三重の盃・干物を順に頂き、  
後、各自三献の吸い物を頂く。<sup>サンゲンヌシームヌ</sup>

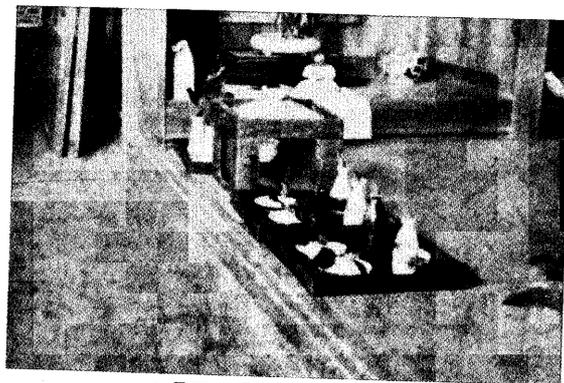
## (四) 正月願

海や池などで溺死をした祖先をもつ子孫が、こうした

祖先の冥福を竜神に祈り、なお、子孫の加護をも祈願す  
る祭り、主に元日の午前に行う。(詳細は諸祝祭の項)

## (五) 二日正月

正月二日は八チパル(初原)という行事が行われる。  
すなわち午前中に鍬で畑を耕し、今年におけるパル(農



八月願・昭和43年大内家  
(大内森業氏著書より)

作場)の仕事始めとする。また、大工や舟を持つ人は大工  
祝いや舟祭り等のある日である。なお、<sup>クニシヨウロウタイ</sup>籠踊いの  
<sup>フウドゥイク</sup>踊り子達は、この日の午前中から主取り宅に集まり、一

番組・二番組の踊りを二、三番歌い踊った後、踊り子連中の家をお互いに回礼するのが通例であった。(大工祝い、舟祭り、機械祭りなどについては、「その他の諸祝祭」の節に説明あり)

(六) 三日正月(高齢の年祝いなど旧暦でする人も少数いる)

正月三日からは年の祝いがはじまる。特に還暦祝い以上は大方盛大になされる。(詳細は「人の一生」で説明)

(七) 四日正月(旧)

正月四日は、家によってはカジヤ祭りがある。祭りは、関係一族は前もって禁忌を守り、供え物を持参してカジヤ現場でなされる(供物・方法は「その他の諸祝祭」を参照されたし)。カジヤの神は荒神中の荒神で当日の祭事や禁忌に特に厳しい。なお、八月にも祭りがある。正月四日に行われるのは、中国での火の神迎えが正月四日であることと関連しないか、との研究家もいる。

(八) 五日正月(旧)

五日から七日まで三日間、午後二時頃から夕刻まで若い男女のハミゴ遊びがあった。これは支那事変が悪化

するに及んで禁止になり、戦争の罪として実に遺憾である。当日午後の昼下がり、思いきり着飾った全島の若い男女が、三々五々、道々三味・太鼓を奏でながらシゴに集まる。特にハミゴの岩穴は、相愛の男女が胸の思いを歌に掛け合い、当時の若者達の命の共同洗濯場だった。なお、上の原っぱでも互いに輪になり、存分に歌い踊り、あたかも天国を地上に再現したかのような情景だった。また、子供達のクイ打ちやタコ揚げなど、青少年の思い思いの一大遊興場となっていた。

島内における往時の日常生活は、農作業に追われた毎日であったから、折目ワウイミのなかでも特に正月のこの遊び行事は「ハミゴ遊び」として著名であり、数々の語り種を残し、与論民謡にも歌い継がれている。

(九) 七日ナヌカヌシユクぬ節供(新・旧)

この日は、ナヌカヌシユクと言われ、豚肉とモチで吸い物をつくり、また、ジューの上に吊るした肉類や野菜類などを下ろして、まぜごはんを作り、先祖にも供え、親族及び近隣にも配る慣習であった。なお門松・床飾りも除く。

(十) 正月八日(旧)

祝女の祝日として、それに関係ある者は祝宴に出席するといわれるが、現在、その痕跡はない。

(十一) チキナー(新・旧)

正月の月の中ほどだから「月中チキナー」というのだろうか。この日の昼食は、田イモとカライモを搗き混ぜて「ウンニーマイ」(イモをねった飯)をつくり、祖霊に供え、近親者にも配って食べ合うのだった。このイモ飯を食べなければフクロウになるといわれた。なお、夕食の膳は、四つ組の膳立料理をし、酒宴を張り楽しく会食するのだった。(四つ組膳は、かつての城字が主だろう)

(十二) ショウロウ(精霊)祭り(旧)

正月十六日に行われ、また、お盆祭りの十四日から十五日にかけても盛大に行われる。ショウロウ祭りというのは、代官・附役など本土人の子孫が祖先を祭り、また、本土で死亡した自己の祖先の霊を祭るといわれる。

さらに、花城ユンヌヌスীগナシと論之主加那志の後裔が、その祖先を祭ると、琉球で死亡した自己の祖先の霊を祭る祭祀サインを「国王祭」(祭日は正月十六日、七月十六日)というが、こ

れらを総称して「ショウロウ祭り」ともいう。

(十三) 祈願祭(旧)

間年マイトウシ(シニユグ祭りのない年)には、正月十五日と五月十五日には一家の無事安穩吉祥を神に祈るという。神年カミトウシ(シニユグ祭りのある年で、厄年ともいわれる)には正月十七日と五月十七日に祈願をなすのが通例である。

この祈願の方式は、神酒二瓶に塩一皿、洗米アレグミイチ一對を神前に供える。さらに米・麦その他の五穀の初、野菜の数々、三組の吸い物を神床の前に供え、年中の一家の災厄除きと安穩吉祥・五穀豊穰・畜類の無事成育を祈る行事が行われた。(往時の城字旧家関係者が主であろう)

(十四) 二十三夜月待ち(旧)

月待ち(月神信仰)、主として城・朝戸地区で行われたといわれる。

## 二 二月の行事

### 彼岸祭り(旧)

旧家では春分を中心に、一週間ないし三日、または一

日行われていた。

### 三 三月の行事

#### (一) 三月三日の節供(旧)

当日は特に女の節供とされ、プチムツチャー(ヨモギモチ)を作つて神前に供え、親元や近親・隣近所にも配り合う。

他の島でいう「浜下り」<sup>ハマオ</sup>をする日で、老幼男女潮干狩りに出たあと、海浜で祝宴を催す。

「三月祭」<sup>サンガチマチ</sup>のある家では、往時の慣習を今も継続して海浜でモチと酒を供えて(その供える台を祭い石<sup>マチイシ</sup>という)、航海安全と豊漁を祈る。これを三月祭という。

また、家によっては「三月願」<sup>サンガチニゲ</sup>と称し、正月願のように、同じやり方の供え物をして、関係者が集まつて祭る家もある。

新生児の浜下りは、女兒は新小ザル<sup>ミソイガマ</sup>、男児は新小テイル<sup>ミテイルガマ</sup>に蓬餅<sup>フチムツチャー</sup>等入れ新浜踏ましをする。近親者も参加、祝福する。

この日は、女の節供とされているので、初産の女兒

のみならず、女性の大人・老人に至るまで災厄被い、若い女性は産厄<sup>ウツクシ</sup>の除法として、神前に神酒二瓶・洗米一對・塩一皿、米・麦などの五穀の初や野菜の初などを供え、それに三組の吸い物を供えて祈願すれば災厄は除かれると信じられた。(女性と蓬餅、浜下りは、蛇の化身と娘との情交の民話と関連)

#### (二) 豊年祭(旧)

三月十五日は、地主神社や琴平神社に豊年祈願後、境内で豊年踊りが奉納される。これは、一年中の蒙雨・干ばつ・台風・疫病災厄防除の祈願である。

#### (三) トウムンチ(旧)

死者のあつた家は、三月一日、三月十五日、八月十五日、十月十五日に「トウムンチ」といつて、墓地に親族集まつて酒宴を開き、死者の霊を慰めたが現在は衰退。

#### (四) ナヌカミシヤとクーヌカミシヤ(旧)

三月二十七日と二十九日は、改葬する日に当たり、埋葬された死者の遺体(三年後の)の改葬を早朝に行う。

## 四 四月の行事

### トーギンガネー（旧）

往時は、この月に「トーギンガネー」という虫送りの行事があったという。だが、これを行った日は不明である。この行事は一家から一人ずつ出て、自分の田畑の作物についている種々の虫を捕って、クワズイモの葉に包んで立長の海浜ハキビナの茶泊チャポツマいに持ち寄り、芭蕉の茎で作った舟に積み、酒瓶・花米・キビダンゴなどを載せて、祝女ノロが祝詞を奏上して海に押し出したという。（一家から一人ずつ）とは全島の各家か？不詳）

## 五 五月の行事

### 五月五日（グンガチグニチ）（旧）

この日は男の節供として、シヨウブを軒にさし、また、子供達は頭に巻いたりして災厄・悪魔除けとした。

初産の男児のある家は、身近なパラジを招いて酒宴を開いて、その子の将来を祝福するのが慣習であった。

また、この節供は子供だけでなく男の節供として、

前日から物忌みをして、当日は神前にお供え物を献上し、災厄を除き、職業に熟達成功するよう祈願する。

五月の月は、昔から神月と称して厄月である。このころは、ちょうど稲穂の開花期で物忌みが多かった。特に十二、三日ごろは、キジ（禁止）と言われ、高所で笠を被って立つことさえ禁じられたという。女が芭蕉の皮をはぎ灰で煮ることも禁止、ホラ貝を吹き鳴らすことも禁じられた。またナガ（一間ごとにシユ口の葉をつけた長い縄を満潮時に引いて、魚を浜辺に寄せる漁法）をなすことも禁じられたという。ちなみに五月にフチャラヘー（悪南風）という稲穂を害する風が毎年一日か二日続いて吹くのが常であるが、稲穂の出始めに、この風にあえば稲穂が枯れるので、植える時期を遅らせたりした。

五月五日より衣替えとなり芭蕉衣にか変わったという。

（注） 祝日の制定や経済成長に伴い本土風に近づく。

## 六 六月の行事（戦時中より衰退）

### （一）見良折目（旧）

ミイラウイミ

六月の初めごろから稲を刈り始め、十五日には、「見

良折目」という新穀祭がある。この日、農家は神前に新米を供え、なお、新米のご飯と酒肴を献じ、豊作の謝恩祭をなす。新米がとれない家は稲穂を供えて祝宴。

## (二) 雨乞い(旧)

各人の家では毎年六月十五日には雨乞いをして降雨を祈る例であつたという。ところが干ばつが長く続けば全島民一戸もれなく総出勤し、各地の雨乞いの聖地で雨乞いがなされた。

神社においては神官が祈願をなし、立長地区はフンシュ(ビドー)の神に祈り、そのうちの幾人かが茶泊いの神(チャンヌル)に祈り、西区は主に前浜の神に、東区は主に赤崎の神に、城・朝戸は管原池の周囲を回って雨乞いし、那間・古里は寺崎ウガンや黒鼻ウガンで祈願し、茶花は辺口ウガンで祈願をした。

雨乞いの神のなかでも「フンシュの神」と「前浜の神」それに「赤崎の神」が雨を降らす主神であるという。

主家の人は酒のカンビン一本と米一合を持参するが、一般は無持参で集合したといわれる。

祭主は以前は祝女であつたが、後、地主が祭主となつ

た。昭和初期の西区の雨乞いの地は前原メーバルであつたが、當時の祭主は易者の久野為治氏であつた。

さて、各聖地で雨乞いする人達は、祭主と共に、その聖地の主神に正座して祈願した後、一定の場所で円形をなして三度ずつ鉄類をたたいて回ること三回して一時休憩をなし、また繰り返して回ること三回してその日は終わり、三日間続けて行う。管原池では、池の周囲を南側から東の方へ、それから北にと三度回って休み、これを繰り返すこと三回といわれる。いずれも左回り。

## 七 七月の行事

### (一) 七夕祭り(旧)

シニユグ年の七月七日に、旧家だけで行われ、一般には行われない。明治の頃は、けん牛や織姫についての意識はなく、学問上達・厄除けの信仰から行われた。二、三日後、小雨にぬれた七色の紙のうち、白が先に落ちれば吉兆、黒紙が先に落ちると凶兆とされた。七夕飾りは十三日まで海に流すか、屋敷の隅で焼き捨てるかする。

また、七夕の日は、祖先伝来の神衣カミギヌや古文書類、現在

の晴れ着など虫干しすれば虫づきが除かれるといわれた。

(二) イヤープジ（祖霊祭・お盆祭り）（旧）

与論島では十三日より十五日まで三日間続けられる。

増尾国恵翁の『与論島郷土史』によれば、

本島では墓所に行って神迎え、または墓所に行き神送りはしない。まれにこれを行う人も近來あるかも知れないが、一般には神は高天原からいつも降臨するものと信じている

と述べられてあるあたり民俗的に関心をひく。

祭式として往時は、新調の蓆を敷くなど表座敷を清浄にし、お客を迎えるようにする。それに高膳を置き、水の初・祖先への生け花・神酒や洗米一對・湯茶などを供え、別膳には、山盛りした御飯・魚や野菜の煮付け・魚のサシミ等を供える。さらに別の膳には、芭蕉の葉の上にニギリ飯を五〜九個供える。なお、サトウキビをお供え物の両側に一本ずつ供え、アダンの実を一個ずつ置く。こうして香を焚いて祭礼を行う。ニギリ飯を供えるのは、伴神に捧げるものであるとし、幼時に死んだ霊に与える

ものであると伝えられる。

お盆祭りには親元である遠祖・近祖に対し、神酒・神米の贈答がなされる。

(三) シバサシ（旧）

十六日の朝早くカヤを刈ってきて、家の軒端や四隅にさす（昔の屋根はほとんどカヤ葺）。また家の味噌ガメや塩ガメ、俵にもカヤの葉を結びつける。さらに水ガメから牛の角・老樹に至るまで結びつける習わしだった（終戦後衰退）。悪魔はカヤの葉を恐れると信じられていた。

また、昔の婦女子は、この日に玉の緒を取り替えて首にかけて。今も旧家には、その玉が保存されているとのこと。

なお、この日は「折目」と言われ、雄牛飼育時代は盛んに闘牛が行われた。この闘牛は大正初期に衰退したが、以前は西区の川崎店の東南のティーチダー（一つ田）、城の若松光茂氏宅後方の田、茶花の嶺峯永氏宅西方も広い田んぼだったが、そこも闘牛場だったと聞く。

(四) シニユグ（旧）

シニグとも言われる。シニユグ祭は稲穀祭の事を表す

ともいわれる。広義には稲穀を中心とする五穀の豊穰及び氏族の幸運（家畜に至るまで）を祈願する祭りである。

シニユグ祭は隔年ごとに行われる。

この祭りは原形を多く残すことから民俗や民族研究家の注目を集めている。

シニユグ祭のある年は十六日から「サークラ」といわれる仮小屋祭場をつくる。

当日神路（カミミチ最初の遠祖が通ったといわれる道）を切り開く。

この日、男は一人当たり米二合、女株（大人の男のいない家）は一戸あたり二合ずつ座元に出し合う。

座元はミキをつくる人を選定して十七日にはミキの製造を終わる。

十七日に旗を持つ人と族の準備をする。

十七日には神酒一本を持参し座元で祈願し、ミキを飲む。ミキを飲めば次のシニユグ祭までは厄よけになる。

当日十七日は本祭で、少年は家打ちヤウチ、大人は拝礼の儀式後酒宴に移り、日の没する頃、神送りをして一同解散。

十八日は休み、十九日の午前中はサークラをなおし

たり、道をなおしたりする。

午後からは各自の所属のサークラに一重一瓶で集まり、酒宴をもち、歌・三味線・踊りで盛大に賑わう（サトゥ地区を述べたがおおかた同様）。

シニユグ祭にはけんか口論や不浄事は厳しく忌まれる。

死者のあった家は十七日の本祭には参加できないが、十九日の最後の日には必ず所属の座元に出なければならぬ。なお、詳細は後述の「シニユグ祭」の節で述べる。

## 八 八月の行事

### (一) ハチガチニゲイ 八月願ツイタチ（旧）

八月朔日から四日の間に行われる祭り行事で、祭式は正月願のときとほぼ同様である。が、祭神は全く別で、現世中に為政者であったり、勤め人や祝女・神職、大工、十五夜踊の踊り子など特殊な業に関係した祖霊に対して行う行事である。祭りに参加する者は平生禁忌を守り（昔は一カ月ともいわれるが、現在は七日以内のところなど

ある）、白米を御膳に敷き、御神酒・シチュギなどをお膳に用意して祭主宅に拝みに行く。

当日祭主宅では、祭神の着用した神衣とか、愛用物・古文書・神扇・大工道具なども供えて祭神の冥福を祈る。平生は、こうした遺品の拝見は許されない。また、無関係者が祭りの酒宴などに参加すれば、後代までも、その祭りに参加しなければならぬとの伝えがある。

## (二) サンゴ祭り（新）

観光ブームの昭和五十年代に入り、新暦の八月初旬、夜を中心に茶花湾岸の浜辺で、花火大会・盆締め大会・バンド演奏・のど自慢大会など、青年団が主になって行われる。観光客なども入り交じって盛大に展開される。

## (三) 米寿の祝い（新・旧）

八十八歳の年の祝いで、八十八を組み合わすと「米」の字となることからだろうか、八月八日を米寿の年祝い日にしている。人によっては新暦でする人や旧暦でする人などある。その他は「人の一生」の「年の祝い」で説明される。

## (四) ハージャー祭（旧）

カジヤの祭りは正月四日と八月二十四日にカジヤにおいて行われるが、鍛冶をした祖先をもつ子孫は、八月四日に家庭で八月願いの祭りもある。ハージャーの神は最も崇りがおそれられ禁忌が厳しい。祭日には主管者によりカジヤは清浄にされ、まわりはシメ縄が張られる。祭るべき人が集まると、司祭者が御酒・塩・米を神棚・フイゴ・鉄床カナドコに供え、神への感謝と一同の家族の無病息災を祈るといふ。煮物は供えない。（詳細「諸祝祭」で）

## (五) 豊年祭（旧）

午後から地主・琴平神社の境内で行われる。三月十五日の奉納踊りと同様で、一番組と二番組が交代でなされる。最後に獅子舞いや綱引きなど行われる。この豊年踊りは地主神社や琴平神社への奉納踊りで、豊年の感謝祈願、島中安穩・無病息災の祈願であり、八月の豊年踊りが最も盛大で観客も多い。詳しくは「十五夜踊」の節で説明される。

日没後、満月の照らす庭先にダンゴを供えお月様に供える。なお祖霊にも供える。子供らは庭先に供えたダン

ゴを盗り集める慣習であった。この習俗は日本本土にもあったと言われる。この月に供えるダンゴは、畑作のものが本物であった。例えばキビダンゴや粟のダンゴ、麦や豆などのダンゴだった。これは稲作以前の習俗とも関連して興味をひく。ところが近年のダンゴ取りは、盗みでなく貰いに来ることが多く、供えるのも米のモチや菓子のようなモチで畑作物によるダンゴと異なってきた。

## 九 十月の行事

### (一) 豊年祭(旧)

十月十五日午後から、地主神社・琴平神社で豊年祭の奉納踊りが境内で行われる。こうして旧暦三月・八月・十月の十五日に年三回にわたってなされる。この奉納踊りは神社への神事の式終了後なされるのである。境内では、奉納踊りの前に相撲大会が行われる。これは古来よりの伝統行事でなく、戦後坂元原澄氏が相撲協会を設立してから行われるようになった。

### (二) ナカミシヤとクーナカミシヤ(旧)

二十七日と二十九日は三月の場合と同じように、この

日は改葬日であるが、現在は八月のこの日におおかた行う。

## 十 十二月の行事

### (一) 二十四日の神(旧)

師走の二十四日は火の神の昇天する日といわれるが、古くは、この神の送り行事がなされた。

この日、家の内外の大掃除をなし、カマドの煤スス払いから天井、家の内外の掃除に至るまでなされる。

新調の畳を敷き、夕刻は、神酒一対・洗米一対・塩一皿、他に五穀の初として米・麦・豆・粟などを膳に盛りあげ、数々の野菜・昆布・乾魚など山海の品々および三組の吸い物・干物・三重の盃を供えて祈願する。すなわち、家内全員を年内守護し給い、幸福を与えてもらった謝礼と今後の祈願をしたという。儀式が終わって祝宴を張ったようだ。

この神のお送りが終わると、すべての神々が昇天したものと考え、パチカユハユル又夜カロー、草クサ又葉ハカラムパー又ナユンル(二十四日の夜からは、草の葉までも妖怪になる)

と言われ、筆者も幼少期は大変おそれたものである。(儀礼は往時の城系の主だった家庭だろう)

(二) オオミソカ  
大晦日

1 門松や床飾りなど

門松を立て、シメ縄を張る。表庭には「シチユギダム又」といわれる薪の割木等を重ねて積みあげる。なお、福床や神床に餅を供え、生け花をする。ジューの上方にシメ縄を張り、肉・魚・種々の野菜など下げる。海浜の人の足跡のない所から白砂を運んで化粧砂を散布する。その他、一切の準備を終え、元日にはホウキを使用しない。

2 古来の伝承

天井の桁ケタにネズミの年取り餅を置く。年の夜はケンをカをしたり、荒い音をたてない。年の晩の井戸の水の重さと翌日元旦の水の重さを比べて、元旦が重いと豊年。

3 シーブ トウシハツテイ  
歳暮と年果てい(新・旧)

二十九日までに親族・近所・知人から歳暮が贈られる。昔は手製の物が贈られ、愛人相互も交わしたという。また、年の暮れ(年果てい)の晩は、自家の親元であ

る遠祖・近祖を拜む。復帰後、新正月に変わり「歳暮」は新暦年末に、「年果てい」も大晦日の夕食後になされる。

## 十一 補 説

年中行事に関しては、増尾翁著書以前の古い記録がなく、古習俗尊重の意味で右著書を主にとりあげた。が、増尾翁は城字の旧家の出身であるため、他地区一般常民慣習をどれだけ知り得たかは不詳である。したがってある程度の違いがあつただろうことは前述の通りである。なお、現代風行事、その他記述もれの一部概略を追記する。

正月にジュー(シメナワ)の上方のカキナヌカシユクに豚肉や野菜などを下げる慣習は衰退。従つて七日節供のジューのかき下ろしは省く。

かつて学校で行われた新年式は、近年自主的行事となり、自治公民館で行う字もでてきた。

なお、老人の年祝いや「敬老の日」のお祝いも各自治公民館で行う字などもでた。

増尾翁の著書に軒等にカヤをさすのは七月十六日とあるが、筆者の少年期は盆の十四、五日頃ではなかつたか。

近年十月十日「体育の日」は、町体育祭として公的な体育行事が催される。